

高島善哉著「アダム・スミス」岩波新書、岩波書店 1968年3月20日刊を読む

スミスにおける古典と現代—古典を生かすもの

1. (1) 古典はそれ自体として永遠の価値をもっている。
(2) 古典を生かすものは古典そのものであって、何かそれをこえたあるものではない。
(3) なぜなら、何百年あるいは何千年という歴史の試煉にたえぬいて、なおかつ不滅の光を放っているものが古典にほかならないからである。
(4) このようにみるのが古典にたいする私たちの第一の見方である。
2. (1) これにたいして私たちはもう一つの見方をもつことも可能である。
(2) たとえ古典はそれ自体としてどんなに不滅の価値があろうとも、古典はそのままでは私たちのものではない。
(3) それは三百年前、五百年前、一千年前の人類の遺産であって、すでに過去のものである。
(4) それがそのままの形で現代に通用するはずはありえない。
(5) 古典を生かすものは現代であり、私たち自身である。
(6) これが古典にたいする第二の見方である。
3. (1) 古典にたいする第一の見方と第二の見方と、どちらがほんとうの見方であるのか、それを論ずるのはもはや無用のことであろう。
(2) 答えはきわめて簡単明白であるからだ。
(3) 両説ともに真理の一面を捉えているけれども、単独では十分でない。
(4) 二つの見方の間にはいつでも往復運動が行なわれるのでなければならないことはいうまでもないのである。
(5) 古典はそれがつくられた時期においてはまだ古典ではなかった。
(6) 古典はそれぞれその現代をもっているわけである。
(7) だから、私たちは何よりもまず、古典をその現代において把握し会得しなければならない。古典をその現代において把握し会得するというのは、古典の精神と方法を知ることである。
(8) また作者の気がまえと意図を知ることである。
(9) これを一言でいえば、古典の底に流れている思想と作者の方法態度を味得することである。
(10) その内容や個々の記述ももちろん軽視してはいけなけれども、それよりももっとたいせつなことは、古典の精神と作者の方法態度なのである。
(11) 私たちはそこに、時代の動向を深く読みとって新しい文化と社会を創造せんとする偉大な人間の生活態度をみることができる。
(12) そしてこれがとりも直さず私たちの現代に通ずることになるのである。

4. (1)これは古典から現代へ下りてくる道であるが、現代から古典へ遡っていくもう一つの道も忘れてはならない。
- (2)私たちは現代に生きていろいろの問題との対決の中から、古典の価値をいくらでも発掘し再認識することができる。
- (3)叩けよ、しからば開かれん。
- (4)それが古典なのである。
- (5)そのためにはまず私たち自身が問題をもつことが必要である。
- (6)もっとも大きな問題をもっている人は、もっともよく古典の価値を発見できる人だ。
- (7)このようにいうこともできるであろう。
5. (1)これを『国富論』についていうなら、人が『国富論』をどのように理解し、そこから何をとり出したかということによって、その人の思想や方法の性格なり水準なりが露呈されるというわけである。
- (2)私たちはスミスをどのようにみたかということによって、現代社会学者としての私たちの力量のほどが示されるということになるであろう。
- (3)日本のある経済学者が、青年に教えて、「諸君は世界最大の学者の最良の書を読め」といった。
- (4)これは古典にたいする私たちの心がまえを説くと同時に、学問にたいする私たちのとるべき態度を教えたものというべきであろう。
- (5)福田徳三のことである。彼は明治から大正にかけてのもっとも指導的な経済学者の一人であった。

P181 ~ 183

<コメント>

「新しい資本主義」を考えるのであれば、まずはアダム・スミスの「感情道徳論」「国富論」「法学講義」の3冊を十分に読み込んだ上、マルクスの「資本論」、エンゲルスの「18世紀におけるイギリス労働者階級」、更にはシュンペーター、アマルティア・セン、ケインズと読み進めることが求められる。

日本であれば、石田梅岩、二宮尊徳、渋沢栄一、福沢諭吉の代表作をじっくり読み込みたい。まずは、この「アダム・スミス」かもしれない。

2022年2月16日(水)林明夫